様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００７６６

研究課題名（和文）The effects of extensive reading on the development of L2 reading fluency and grammatical ability and on the development of writing ability

研究課題名（英文）The effects of extensive reading on the development of L2 reading fluency and grammatical ability and on the development of writing ability

研究代表者
吉澤　清美（YOSHIZAWA, Kiyomi）

関西大学・研究推進部・非常勤研究員

研究者番号：８０２１０６６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では次の3点を検証した。（１）英語での多読を行うことは読みの下位処理の自動化を引き起こし、読む速度のみならず、学習者の中間言語、特に、文法・統語知識に影響を及ぼすのか。（２）多読学習者の読みの発達を妨げている要因は何か。（３）多読は学習者のライティング力発達にどのような効果を与えるのか。次の結果を得た。（１）多読は 外国語での読みの流暢さを向上させ、それは読解力の向上も伴う。多読が文法・統語知識の向上、更に、産出面への影響については、今後の分析が待たれる。（２）多読を成功させるには、読書量、読書行動の両方が重要である。（３）多読は詳細で一貫性のある英文を書く力の発達へ繋がる傾向にある。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究結果の学術的意義は外国語での読みの発達のメカニズム解明に寄与する。また、その社会的意義としては、本研究結果は外国語教育カリキュラム構築に示唆を与える。第一に、リーディング、ライティングを個別に学習させるのではなく、両者を統合したスキルとして教える。同様に、初期の文法・統語学習が終わった段階にいる学習者に対しては、実際のコミュニケーションの中で言語がどのように働くのかということに関して、多くのusageに繰り返し触れることを可能にする多読が寄与すると思われる。

研究成果の概要（英文）：The current study investigated the following points. (1) the impact of extensive reading (ER) in English on the development of reading fluency and grammatical ability in Japanese English as a foreign language learners; (2) what factors contribute to the success of ER experiences; (3) the impact of ER on the development of writing ability in Japanese EFL learners. Concerning the first point, the research results indicate that ER improves reading fluency and reading comprehension. In relation to the effects of ER on learners' grammatical ability, further data analyses need to be conducted. Concerning the second point, both reading amounts and reading behaviors contribute to success in ER. Concerning the third point, the findings of the study indicate the likely positive effects of ER on the development of EFL learners' writing skills in limited input learning context.

研究分野：応用言語学

キーワード：多読　文法・統語能力の発達　中間言語　読みの速度の発達　リーディングとライティングの接点　外国語での読み

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

外国語での多読を継続することにより、学習者は大量のリーダーを読みながら読みのプロセスの下位処理の自動化を発達させると考えられる。このため読みの流暢さ、特に読む速度が増すと考えられる。この時に読む速度が速くなるだけではなく、学習者の中間言語に質的な変化が生じ、学習者の中間言語の構造に変化が起きるのではないかと言える。

更に、先行研究では多読の効果についての肯定的なものが国内外で報告されているにも関わらず、学校教育の現場ではその活用が限られている。また、限られた授業時間をリーディング、ライティング、文法・統語能力など個別のスキル、知識の習得にあてるのではなく、多読をしながら、統語・文法知識の理解を深化させる、読んだ内容に関しての意見を書くなど、リーディング、ライティングを統合したスキルとして扱う外国語教育の在り方に対しての実証的なエビデンス収集を目指した。また、多読を行っていても読解力などが伸びない学習者の躓きの要因を分析し、多読指導促進へ寄与したいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は以下である。(1) 多読を継続することにより読解プロセスのうち文法・統語能力はどのような時系列的変化を見せるのか。更に、文法・統語能力の発達は英語力、読書量、読みの流暢さの発達とどのような関係にあるのか。(2) 読みにおける統語能力、流暢さが発達した学習者には量だけが影響を与えているのであろうか。多読における読み物（テキスト）は学習を促進する資源であり、学習者にとっては理解可能なインプットである必要がある。しかしながら、文法・統語能力や読む速度があまり伸びない学習者も僅かながら存在する。このように文法・統語能力や読む速度があまり伸びない学習者は何が躓きの要因となっているのか。(3) 多読を継続することにより、ライティング能力はどのように発達するのか。

３．研究の方法

（1）①上記研究目的 (1)、(2) を検証するために、日本人大学生の多読実践クラスの学習者（多読群）、多読を行わないクラスの学習者（統制群）に研究に参加頂いた。多読群に対して Edinburgh Project on Extensive Reading (EPER)プレイスメント・プログレステストをプログラム開始時、中間時、終了時、EPER 読解テストを開始時、終了時に実施した。統制群はそれぞれ開始時と終了時に実施した。上記とほぼ同時期に、学習者の読む速度を測定した。更に、多読群には一年間を通して、学習者が読んだ本の記録をとり、時系列的に読了した本の種類と読書量を算出した。また、参加者は各多読本の読了後に読書記録手帳に本のタイトル、レベル、読み時間、コメント等を書いた。②読書量以外に多読に影響を与える要因を探すため、多読群学習者の開始時の EPER プレイスメント・プログレステストの結果、学習者をそれぞれ下位、中位、上位グループへのグループ分けを実施した。各レベルの中で読解力が伸びている学習者と伸びていない学習者をそれぞれ約１０名選出し、選出された学習者の読書記録手帳を評価項目に従い、質的な分析を行い、多読学習者の躓きとなる要因を分析した。研究協力者として髙瀬敦子氏、大槻きょう子氏に全般的に協力頂いた。

（2）上記研究目的（3）を検証するために、日本人大学生の多読実践クラス、多読を行わないクラス（統制群）が参加した。EPER プレイスメント・プログレステスト、日英バイリンガル文法チェックテストをプログラム開始時、終了時に実施した。終了時の EPER テストは多読クラスのみに実施した。また、上記とほぼ同時期に、両群の学習者は英文テキストを読み、その要約を英語で書いた。要約文を電子化した後、各要約文に書かれている命題（propositions）と要約文全体の一貫性（coherence）の観点から分析を行い、プログラム開始時と終了時に見られる要約文の変化を調べた。研究協力者として髙瀬敦子氏、大槻きょう子氏に全般的に協力頂いた。

４．研究成果

(1) ①上記研究目的 (1) を検証するため、読解力、読みの速度の時系列的変化を検証した。図１は多読群、統制群のプログラム開始時（Time1）、終了時（Time２）の EPER 読解テストの結果を示す。次に、二要因の分散分析を行い、開始時、終了時の EPER reading の結果が両群でどのように異なるかを調べた。時間とグループ間の交互作用が有意であったので、単純主効果の検定を行った。多読群の開始時、終了時の読解テストの結果には有意差（0.1%の水準）があった。統制群では有意差は見られなかった。また、グループの単純主効果検定の結果、開始時、終了時の両群の差はそれぞれ有意であった。これらの結果は多読が読解力の向上を促進していると言える。②読む速度の伸びがグループ間で有意差があるかどうかを検定した。図２はプログラム開始時と終了時の各グループが一分間に読める単語数を表す（Words per minute）。統制群では終了時は開始時よりも約５単語速く読めていた。多読群では約 20 単語速く読めるようになっていた。このグループ間の違いは統計的な有意差を示した。③日英バイリンガル文法チェックテストを実施予定であったが、実施できなかった。このため、今後 EPER プレイスメント・プログレス

テストの特性構造の明確化を行い、統語・文法知識項目を決定し、それらの時系列的変化を分析する。更に、研究目的（3）において実施した日英バイリンガル文法チェックテストの結果も踏まえて総合的に考察を行う。

図１読解力の変化

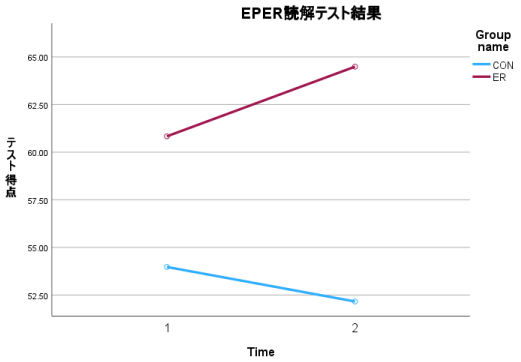
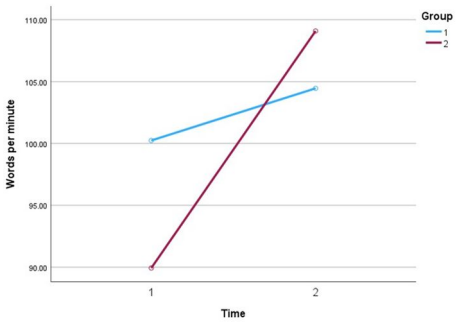


図２ 読む速度の変化



(2) ①上記研究目的（2）の読書量の重要性を検証するため、多読開始時、終了時の EPER プレイスメント・プログレステストの結果を英語言語能力（English proficiency)、EPER 読解テスト結果を読解力として、読書量を加えパス解析を行った。読書量からのパスは有意であり、モデル適合性も高かった。読書量は英語言語能力、読解力向上に寄与していた。

②読書記録手帳を評価項目に従い、質的な分析を行った結果、読書量に加えて、二つの読書行動が重要であることが明らかになった。第一のポイントは多読本の選択方法である。多読開始期の段階では学習者の能力よりも若干易しい本を選択し、学期が進むにつれ、本のレベルを徐々に上げる。更に、多読本のシリーズ、レベルはある程度の期間同じものから選択する。同じシリーズ、レベルの多読本を選択することによって、物語の設定等が似ており内容理解に注意資源を向けることができ、語彙・構文など同レベルのものに繰り返し触れることができると考えられる。読解力が伸びない学習者は多読開始期から自分の言語能力よりも難しい本を読もうとする、本のレベルも徐々に上げていないことなどが判明した。また、選択した多読本のシリーズ、レベルにも一貫性を欠いた。第二のポイントとして、読解力が伸びた学習者は一年を通して多読を継続しており、更に、読了後のコメントは具体的な本の内容に言及していた。読解力が伸びなかった学習者は読書記録手帳提出直前の一週間で大量の本を読むなど、継続して多読を行っていなかった。また、コメントも内容に言及するものではなく、「よかった」、「難しかった」など印象的な表現が多く散見された。

③多読学習者の読書記録手帳の質的分析は国内外の多読研究の中でも極僅かである。本研究の学術的意義は Nation ＆ Waring（２０２０）が多読の５つの特徴をあげているが、最も優先されるのが、「(学習者にとって）適切なレベルの本を読むこと」とし、具体的には、未知語が２％以内であり、文法事項が学習者にとってほぼ習得済みであることとしている。学習者にとって易しい本を読むことは理解内容をしながら読むことを可能にし、未知語の習得にもつながる（p. 3-5)。本研究結果は Nation ＆ Waring の主張に実証的なエビデンスを提示する。本研究の教育的意義としては、多読における指導者の役割の重要性を示したことである。この研究では学習者がより fluent reading を行うようになるためには、読書量とともに学習者の読書行動も重要と

なることを示している。どのような読書行動が学習の躓きを引き起こすのかを明示することによって、それらに適切に対応できる教師の役割が多読指導に不可欠であることを示している。

(3) ①上記研究目的（3）のデータ分析は、多読群と統制群の要約文に見られる単語数、命題数、並びに要約文全体の一貫性の観点から行った。プログラム開始時と終了時の単語数に関しては、統制群が 12、多読群が 15 単語程伸びていたが、グループ間に大きな差は見られなかった。下記図３はパラグラフ毎に正答した命題数の割合が事前と事後でどのような伸びをしたのかを表している。横軸の P1～P4 はそれぞれパラグラフ１～４を表す。統制群は事後で、第１パラグラフの正しい命題数が 12%増えているが、残りのパラグラフや一貫性においては 3～7%にとどまっている。多読群では、事後において正答した命題数が第一パラグラフでは２%と減少しているが、残りのパラグラフでは 6～20%増えていた。また、一貫性も 10%増えた。ラッシュ分析を行い、命題の得点が 0～100 点になるように変換し、多読群と統制群の伸びを数値化した。図４は多読群と統制群の Time1（事前）、Time2（事後）の得点を表す。事前では両グループに差は殆どないが、事後では多読群の伸びが 12.68 であったが、統制群では 5.41 であった。両者の伸びの差は統計的に有意に近づいているが、有意差は示さなかった。更に、一貫性に関しても、ノンパラメトリック検定の結果は両グループとも事前と事後の有意差はないという結果を示した。

②本研究は多読が外国語学習者の要約文を書く能力の発達に効果があるのかを検証した。この研究は二つの点においてインパクトが大きい。第一に、言語リソースが限られた環境で外国語学習をする学習者にとって、通常カリキュラムの中に多読を部分的にでも導入することのメリットを提示すことができた。国内外の先行研究では多読が授業の主なタスクであることが多いが、今研究の参加者は両グループとも指定されたリーディング教科書を使い、多読グループは授業時間の 3 分の１ほどを多読に費やし、授業外での多読が奨励された。第二の点は、リーディングとライティングを統合したスキル指導の可能性に肯定的なエビデンスを提示できたことである。

③今後、プログラム開始時、終了時実施の日英バイリンガル文法チェックテスト結果の時系列的変化、要約文の動詞の項に関する質的分析を行い、文法・統語知識を認知、産出の観点から分析する。

図３　命題と一貫性の伸び

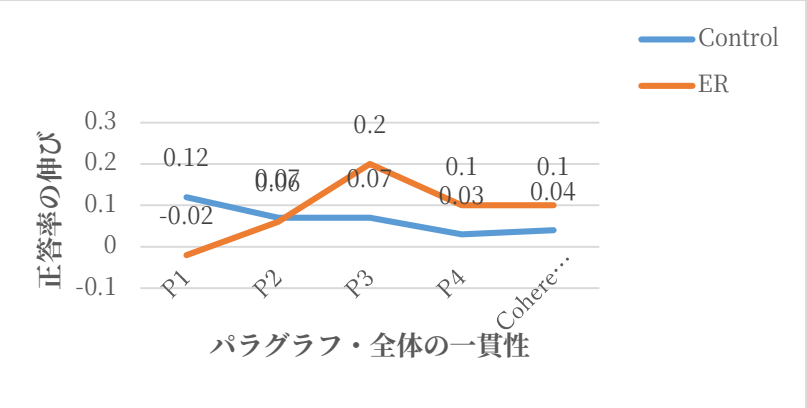
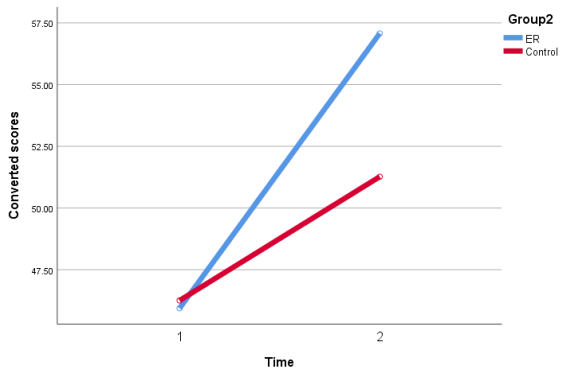


図４　Converted scores of propositions



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Kiyomi Yoshizawa, Atsuko Takase, Kyoko Otsuki	４．巻 28
２．論文標題 The trait structure of the Edinburgh Project on Extensive Reading Placement/Progress Test	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Journal of Foreign Language Studies	６．最初と最後の頁 71-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kiyomi Yoshizawa, Atsuko Takase, Kyoko Otsuki	４．巻 5
２．論文標題 L2 Reading Proficiency Improvement and Reading Behaviors among Different Levels of Readers: Extensive Reading in an EFL Context	５．発行年 2020年
３．雑誌名 The Fifth Extensive Reading World Congress Proceedings	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kiyomi Yoshizawa	４．巻 22
２．論文標題 Extensive Reading and Learner Agency: A Case Study	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Foreign Language Studies	６．最初と最後の頁 93-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Kiyomi Yoshizawa, Atsuko Takase, Kyoko Otsuki
２．発表標題 What makes extensive reading successful in the Japanese EFL context?
３．学会等名 British Association for Applied Linguistics Northumbria University（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kiyomi Yoshizawa, Atsuko Takase, Kyoko Otsuki
２．発表標題 How does extensive reading help Japanese EFL learners’ summary writing ability?
３．学会等名 Extensive Reading Around the World 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kiyomi Yoshizawa, Atsuko Takase, & Kyoko Otsuki
２．発表標題 Growth in L2 proficiency and reading behaviors among different levels of readers in EFL context
３．学会等名 Extensive Reading World Congress 5（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉澤清美、 髙瀬敦子
２．発表標題 英語を外国語として学ぶ学習者の多読と文法力の発達
３．学会等名 全国英語教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kiyomi Yoshizawa, Atsuko Takase, & Kyoko Otsuki
２．発表標題 Text reading fluency and reading comprehension among Japanese EFL learners in relation to extensive reading
３．学会等名 American Association for Applied Linguistics 2019 Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉澤清美、高瀬敦子、大槻きょう子
２．発表標題 多読が文法力と読解力の発達に及ぼす影響とその関連性
３．学会等名 日本多読学会2018年次大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高瀬敦子、大槻きょう子、吉澤清美
２．発表標題 英語力の伸びを測る "EPER PPT"
３．学会等名 日本多読学会2023年次大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Theron Muller, John Adamson, Steven Herder, Philip Brown, Kiyomi Yoshizawa, Atsuko Takase, Kyoko Otsuki, Masumi Narita, Akiko Nagao, Barry Kavanagh, Dominique Vola Ambinintsoa, Kie Yamamoto, Anuja Thomas, Mark McGuire, John Rucynski, Disi Ai, Danya Shaalan, Laura Tayler, Lijie Shao, Tim Murphey	４．発行年 2023年
２．出版社 International Teacher Development Institute	５．総ページ数 324
３．書名 Re-Envisioning EFL Education in Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	高瀬　敦子 (Takase Atsuko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大槻　きょう子 (Otsuki Kyoko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関